丹東で白朗を想う

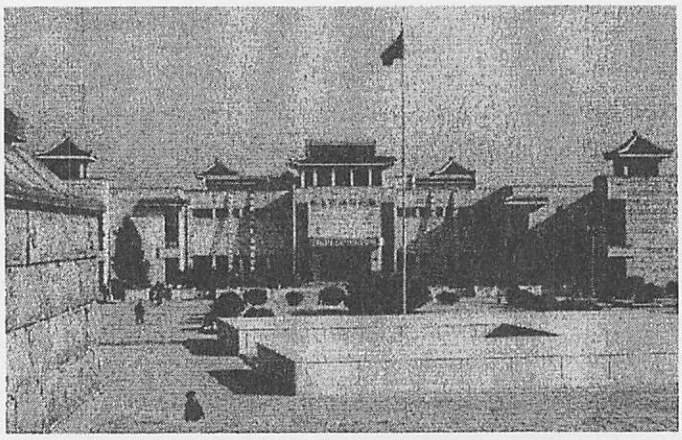
西田千津

在日朝鮮人である友人は、子どもの頃、日本で差別されたため「ちょうせん」という呼称が好きではなかったが、民族学校で、「朝鮮とは朝が鮮やかな国という意味です」と教えられ嬉しかったと話していた。白朗も朝鮮の自然を愛した。彼女が訪れたのは戦時中の平壌であったが、「平壌七日」には、自然に対する感動があちこちに散りばめられている。アメリカ軍・国連軍は、圧倒的な戦力で空爆による民間人殺傷と家屋破壊を行い、朝鮮の美しい国土を台無しにした。ところが荒れ果てた血まみれの朝鮮戦争の中から白朗が拾い上げた物は、美しい花であり、豊かな収穫であり、歌であり、戦場の中で助け合う人の温かさであった。

イチョウ並木を抜けて
「抗美援朝戦争紀念館」へ

空爆で我が家が破壊されても挫けることのない英雄的な民衆、けなげに生きる孤児との触れ合い、中国軍の厚遇により改心した捕虜との触れ合い…とりわけ、負傷しても、夫を殺されても、子どもが負傷しても、個人的なことだからと振り返らず、国家のため、革命を成し遂げるために邁進する超人的な女性たちの姿は印象的である。こうした女性の生き方は、白朗自身の人生と重なる。中華人民共和国成立以前の旧社会の中で、女性は人権が認められていなかった。生き生きと困難に挑戦する朝鮮女性の姿に、男性に負けない女性の地位の向上と自信が感じられる。

訳者の力不足から、白朗の熱情に溢れた力強い文体を日本語で充分に表現しきれなかったが、原文は、どの一文も力に満ち、リズム感にあふれ、詩的な比喩が楽しめる。朝鮮戦争の驚くべき実態に加えて、登場する人たちの純粋さや爽やかさが心地よく、一気に読み終えてしまう。



さて、私は2013年11月初め、WIDF朝鮮戦争真相調査団に関する藤目先生の研究グループに加えていただき、晩秋の瀋陽・丹東を訪れた。瀋陽・丹東には、朝鮮戦

争に関わる戦争遺跡があちこちに残されている。丹東の抗美援朝戦争紀念館は、銀杏並木が美しい小高い丘の上にある壮大な建物だった。

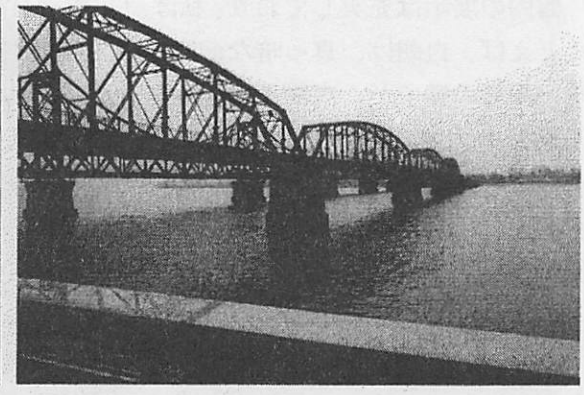
館内の展示は充実しており、私は、「平壌七日」の登場人物に再会できたような気がした。たとえば、白朗は、真っ暗な洞窟の中で労働する人々を感動的に描いているが、まさに、暗い洞窟の様子が、実物大の蝋人形を使ってリアルに再現されていた。その他、戦闘の様子がジオラマで展示されていたりと、様々な工夫がなされていた。「平壌七日」では人々の空爆被害や細菌戦を行った兵士が捕虜として登場するが、地図で空爆被害を受けた地域、戦闘地域、細菌戦に使われた武器などの展示もあった。また館内には多数の貴重な写真が展示され、戦時下の人々の息づかいが伝わってくるようだった。

なかでも私たちにとって一番の成果は、モニカ・フェルトンが捕虜と歓談する写真に出会えたことである。捕虜との交流は、「平壌七日」にもかなり具体的に記されている。細菌戦にかかわったクインを含め、彼らは、学習会・討論会などを通して自ら変わっていく。イギリスの平和運動に関心を寄せる捕虜たちは、中国人民志願軍のために乾杯する。夢のような場面であるが、写真のフェルトンの満面の笑顔、捕虜たちの楽しそうな顔を見ると、この記述は本当だったのだと、私は、なんだか胸が熱くなった。

フェルトンの写真以外で印象に残った展示写真がある。群衆を前にし、「母親たち！行動をはじめよう。祖国を守り、平和を守り、子どもたちを守ろう」と書かれたプラカードを持った女性が大きく写っている。その誇り高い表情もすばらしいが、女性に高く抱かれた子どもが、全く物怖じせず堂々としている姿には感心した。それは「平壌七日」に描かれている朝鮮女性たちや子ども達の気高さだ。2 人は中国人親子だと思われるが、私は「平壌七日」の孤児院訪問の件を読んでいたので、実の親子かどうかはわからないと思った。大勢の孤児を出した戦時下で、母親は我が子だけを守ればいいというわけではない。子どもを産んでいるかどうかも関係なかったのだと思う。この写真からは、社会の力で子どもたちを戦火から守ろうという気魄が伺える。白朗が描いた朝鮮の女性たちと同じ精神だ。平和の実現と女性の地位向上は表裏一体だという気がした。

国連軍は国境を越えて、丹東にも爆撃をした。中国の人にすれば、朝鮮戦争を戦うということは、とりもなおさず、国土を守り、長く続く戦争を終わらせ平和を実現するための

戦いだという意識だったのだろう。展示されている写真には、戦時下とは思えないような希望にあふれる笑顔が目立った。



写真は、当時の鴨緑江を渡る人々である。物資を運んでいるようだ。戦争中、橋は何度も爆破され、爆破された「断橋」は戦争遺跡として今でも残されている。その横に立派な橋が架かり、今の中国と朝鮮民主主義人民共和国とを繋いでいる。

丹東は平壌と同じく「英雄の町」と呼ばれる。「平壌七日」と抗美援朝戦争記念館に流れる英雄スピリットとは、敵が圧倒的な武器を持っていても仲間を信じて果敢に抵抗し、平和を求めて、革命という理想の下に生活を続ける精神なのだと感じた。

紀念館を出た後、私たちは中国の国旗を付けたボートで鴨緑江を遊覧した。タクシー運転手は、「普通のツアーでは出会えないような、痩せてガリガリの朝鮮の子ども達を見ることができる」という触れ込みで、船着き場まで私たちを連れて行った。ボートにはタバコのカートンが用意されており、それを100元で買って対岸に投げてもらうと、崖を駆け下りてタバコを取りに来る子ども達の姿がボートから見えた。拾ったタバコは売ってお金に換えるのだという。タバコを投げる運転手の様子を見て、言葉は悪いが、動物園で動物に餌をやっているような気がして、気持ちが塞いだ。私たちは共和国の貧しさや食料不足などのニュースを耳にしていたり、朝鮮半島の分断に複雑な思いを抱いていたりして、対岸を一目見ようと必死になった。このような人の気持ちを逆手にとって金儲けするとは…やりきれない気持ちにもさせられた。しかし彼は気さくな人物で、この「遊覧」で儲けて家を建てたと、悪びれた様子もなく、むしろ得意そうに話していた。このような現在の中国人の姿は、白朗が描いた世界とは、かけ離れている。中国では、このように実にこまめに金儲けをする人が多い。丹東は小都市であるが、夜になるとビルは煌びやかにライトアップしていた。朝鮮戦争時から考えると中国はすっかり変わってしまったようだ。

それでもやはり、丹東は魅力あふれる街であった。「断橋」には「平和ばんざい」の文

字と平和の鳩が象られたレリーフがあった。朝鮮の人々が、圧倒的な軍事力をもつ連合軍の軍事力に負けなかったという朝鮮戦争の記憶が、今後、東アジアの平和を実現していく力になればと思う。

ところで、最後に付け加えておきたいことがある。「平壌七日」でフェルトンが捕虜たちに語っていたが、朝鮮戦争当時、イギリス国内で、米兵が、女性に対する誘拐や性暴力を行っていたという事実だ。そして現在も、アメリカの軍事基地被害は続いているという事実である。

今日（2014年1月20日）、沖縄の辺野古基地移転に反対する候補が、名護市長に再選したというニュースが入った。それは、軍事基地という巨大な暴力を許さず、なによりも自分たちの生活を守ることを選んだ小さな沖縄の決意である。今も続いているのは基地被害だけではない。平和を希求する心も、しっかり生き続けていることがわかる。

藤目ゆき先生に「平壌七日」の翻訳を勧めていただきご教示いただけたこと、瀋陽・丹東の旅に参加して神田修さん、梁東淑さんに出会えたことは、たいへん幸運だった。また翻訳にあたり、中国語の微妙なニュアンスについて、立命館大学大学院生の陸敬東さんに有益なアドバイスをいただいた。心から感謝の意を表したい。